主題

「文学史」とは「過去」の文学の「評判」の集積ではなく、現在の自分たちを基点に自在に作り上げることのできる枠組みである。

「文学史」という言葉には、過去の作家とその名作とを羅列した、固定的で無味乾燥な「文学」の「歴史」というイメージがともないやすい。しかし、「文学史」を時間の間隔と関係なしに共通のテーマを抱えた文学活動としてとらえることができるのではないかと筆者は考える。「文学史」を絶対視するのではなく、「過去」の小説と「現在」の小説とを直結・応答させることで、「文学史」自体があくまでも「現在」を基点とする流動的な枠組みであるという一面が浮かび上がってくる。

構成

構成1

段落	ページ・行	段意
第一段	初め～P三〇一・2〈「歴史」というものに触れた瞬間でした。〉	ビートルズの新曲がラジオで放送された日、「わたし」は「歴史的瞬間」に自分が立ち会ったことに大きな感動を覚えた。それは「わたし」が生まれて初めて「歴史」に触れた経験だった。
第二段	P三〇一・3〈今思えば、わたしは、すごく単純な少年でした。〉～P三〇四・1〈しかし、本当に、そうなのでしょうか？〉	それまでの「わたし」は、偉大なもの、立派なもの、おもしろいものはすべて「過去」にあり、「現在」は魅力に乏しいと考えていた。また、時間が「不可逆的」である以上、「過去」は遠くけっして手の届かないものとも考えていた。こうした単純な「歴史」観は、学校での歴史教育の影響で作られたものだった。
第三段	P三〇四・2〈わたしはもう半世紀以上も、たくさんの本を、〉～P三〇五・9〈そのときが最初だったかもしれません。〉	実際にたくさんの小説を読んでいくなかで、「過去」の小説と「現在の小説の類比性・共通性に気づいた「わたし」は、「文学史」という「文学」に関する「歴史」に違和感を覚えるようになった。そして「わたし」は「評判」に縛られない「文学史」を書こうと思いはじめた。
第四段	P三〇五・10〈わたしは、「過去」の小説を、〉～終わり	「歴史」や「文学史」という枠組みに縛られた小説の評価から自覚的に距離をとり、あらためてそれぞれの小説を実際に読むことをとおして、自分自身を基点にした「文学史」を作り出すことができる。

構成2

第一段　「歴史」に触れた経験（一九六八年の「わたし」）
　　↓ビートルズ＝「偉大な人たち」

第二段　「わたし」の「歴史」観（「少年」の「わたし」）
　学校での歴史教育の影響
　「過去」…偉大なもの・立派なもの・おもしろいもの
　「現在」…つまらないもの
　「時間」＝不可逆的なもの
　　↓「過去」＝不変のものという認識

第三段　「文学史」への違和感（「半世紀以上」経た「わたし」）
　①文学史上の認識
　　↓遠い「過去」の出来事、遠い「過去」の作家が書いた作品
　②実際に「過去」の小説を読む体験
　　↓「過去」の小説と「現在」の小説の間の類似性・共通性の発見

第四段　「文学史」的思考からの離脱
　「歴史」≒「鑑賞するために壁に掛けられた絵」
　「歴史」＝「自分」（「現在」）と「過去」の応答のなかで形成し得るもの